

排除生む大阪の「団体戦」

写真は3月1日にレポートした大阪の「ありえへん!チャレンジテスト」。朝日新聞 10 日夕刊で取り上げられたので紹介したい。

「団体戦」大阪の中学生を対象にした統一試験「チャレンジテスト」はそう呼ばれる。中学校の内申点が絶対評価になったことに伴い、2016年、本格的に始まった。

学校や教員による極端な評価のブレを補正するのが目的。5 教科の学校平均点に応じて、高校受験に使われる内申点の平均の幅が府から割り当てられる仕組みだ。保護者向けにチャレンジテストの説明会を開く中学校長は、問題点をこう表現した。「テストの平均点の高い学校は内申点の 5、低い学校は 1 の玉が余る。誰かが引き受けな、あかん」「人のふんどしで相撲を取らされるようなもん」「1 日の 5 教科の結果を、1 年の 9 教科の評価に反映させる。わやくちゃですわ」

「団体戦」は平均点を下げる生徒への排除を生む。京都造形芸術大准教授の浜元伸彦(42)は 1 月、大阪市の集会で事例を紹介した。テスト当日に、「今日はこれで帰るわ」とあいさつだけして帰った生徒▽テスト前日に「おれ、明日、休もうかな」と生徒が終礼でつぶやくと、クラス全体から拍手が起きた▽特別支援学級の生徒がテストを受けずに教室で待機した一。長男(16)が不登校だった箕面市議の村川真美(46)は、中 3 のテスト前に、「うちの学年は不登校が多いからやばいで」と他の保護者からやささやかかれ、いたたまれない思いをした。テストは学力の定着確認ではなく、学校や教員の評価に使う。小 4 の長男が大阪市立小に在籍する弁護士の橋本智子は「こんなインチキなテストはない。子の学習権の侵害にあたる」と指摘した。教員や保護者らでつくる「子どもをテストで追いつめるな!市民の会」は、ブログのコメント欄で事例を集めていて、大阪弁護士会に近く人権救済を申し立てる。

大阪市はさらに、小 3～6 に「学力経年調査」、中 3 に「統一テスト」を課す。テストで結果を出した学校には校長経営戦略予算が配分され、放課後の補習に塾講師を雇う学校もある。市内の保護者ら約 60 人が教員へのエールを送り、踊る動画「ゆる一くつながつた保護者たち@大阪」にはこんな歌詞が登場する。「大阪市の中 3 生、テストが年間 20 日、こんなに多いとこないで 子どもらもほんまにしんどそう」出演した村田恵美(40)の長男は中 3。小学校でいじめを受けて不登校になり、今は週 6 時間だけ登校する。主治医は「緩やかに引き続きることが大事。テストは受けなくていい」。一方、学校は「知的に問題がないなら受けてください」。村田は腑に落ちない。「なぜそこまでテストにこだわるの?」大石晃子(42)は小 4 の長女が持ち帰ったテストの点数分布図を思わず確認した自分を省みた。「そこに点数があれば、意識させられる。全員を競争に巻き込むテストは毒。自由にならなあかん」 =敬称略



(2020 年 3 月 14 日)